

講演会などの記録

アメリカの多文化主義と多文化教育 —多様性の尊重と共生をめざす—

講演者：横田啓子教授（五大学東アジア研究所日本理解教育研究員）

日 時：June 13, 1996 (11:10-12:40)

場 所：シーベリーチャペル

アメリカ社会には人種問題に始まり、宗教、身体の状態、性別、年齢、階級、地域、セクシュアリティなどの差異によって、差別と排除が存在してきた。多文化主義は、アングロサクソン系白人文化への同化主義による（排除と差別を合理化する）統合を否定し、多様な差異の平等な包括（inclusion）による新たな社会統合を目指す。

差異は広義の「文化」として捉えられ、様々な人々の文化的価値の対等性と諸権利が平等に保証されることで、自由な自己実現（基本的人権）が可能になると考える。多様でありながらも、より民主的な社会の実現のために共和の精神に基づく共生を主張する。

差別解消のために教育分野においては、公民権運動に影響されて70年代に主にマイノリティを対象にしたエスニックスタディズが導入されたが、それは白人文化の下層として存在するエスニックという上下関係を越えるものではなかった。そこで、80年代になると、平等に多様性を尊重する多文化教育が導入されるようになった。

例えば、白人男性中心の歴史記述を見直し、実際にアメリカを構成する先住民や様々な民族出身の人々、女性も含めた歴史をすべてのこどもに教えるなど、教育内容から教授法、スタッフの人種、性別の割合などの学校経営や、教員養成教育にいたるまでの教育全般にわたる質的改革が行なわれている。

これは、21世紀には人口の四割以上が有色人種で占められるようになる社会状況をより現実的に民主的に反映するための社会運動といってもよいだろう

う。

—多文化教育の目標—

人間の個性は多面的に色々な要素から構成される、世界に一人しかいない大切な存在である。多文化教育はそこに人間の尊厳をみる。

多文化教育は自分に自信と誇りを持つアイデンティティ形成と成長を基盤にする。他者の違いを尊重し協力できるために、コミュニケーションや問題解決の技能、「自分にされて嫌なことは人にしない、他者を傷つけない」という道徳や正義、共通のルールを教えるなど、知識、態度、能力が体得できるように、幼児教育から大学教育にいたるまで成長段階にあったカリキュラムが実践されている。

これは、人種間の「憎しみによる犯罪」や暴力社会を解決するための道のりは長いが確実な一つの解決法としても考えられている。

—「多文化」をめぐる続く政治論争—

多文化を「分離」とみなす西欧古典保守派、「反有色人種」のレトリックとして使う白人優越派、「統合」の方法と考えるグループなど、現在、低成長経済と高齢化社会において「パイの取り合い」をめぐる反移民感情が高まっている中で、多文化教育は、政治的権力闘争の圧力を受けている。

*著書「アメリカの多文化教育」(明石書店)
(講演は日本語で行われました。)

(文責：横田啓子)